抜粋

千總文化研究所 年報

【 第 5 号 】

2022年5月－2023年4月

Institute for Chiso Arts and Culture
Annual Report [Fifth issue]
May 2022—April 2023

ご挨拶

千總文化研究所
代表理事
西村總左衛門

この度、一般社団法人千總文化研究所の2022年度年報を刊行いたしました。

千總文化研究所は、千總が所蔵する美術品、ならびに千總が手がけてきた染織品を構成する技術といった有形・無形の文化財を、多角的な視座で保存管理・調査研究する団体として2017年に設立されました。「京都」「技術」「美」を活動の3本柱に掲げ、研究者、技術者、アーティストの方々をはじめ皆様と共に新たな価値の創造と文化芸術の振興を目指し、活動しております。

2022年度は、新たに染織分野の研究員を迎え、複数の研究活動と教育活動を実施することができました。

研究活動のひとつは、千總12代当主・西村總左衛門に関する基礎的研究です。千總に遺された書簡や各種賞状ならびに同時期に収集された版本などから、12代西村總左衛門の活動を整理すると共に、近代における千總当主の理念を解明するものです。もうひとつの研究活動は、近世から近代における真宗大谷派の染織品に関する研究です。真宗大谷派（東本願寺）と富山県井波別院瑞泉寺に所蔵される法衣装束や荘厳具の調査から、千總が手がけた染織品と真宗大谷派寺院が持つ文化との関係を読み解きました。

両研究は、当時の千總がどのように美と向き合い、美を創造したのかを多角的に検証するための端緒を開くものです。

一方、教育活動では、新たに中学生向けの課外プログラムの開発に取り組みました。着物を製作するための技術や色や模様の背景にある日本文化を、中学校の教科と結びつけた講義とワークショップにより学ぶものです。染織技術や染織文化を題材とする教育プログラムは、2021年度より実証的研究を重ねています。日本の伝統的な技術や文化を、これまでにない文脈のなかで再構築する試みでもあります。そうした教育プログラムが、子どもたちの主体性や創造性の育成に資することにつながると、しだいに明らかとなって参りました。

その他、文化財保存の専門家を目指す大学生のための産学連携事業や、京都の地域文化と千總のつながりを紐解く試みとして、近世に存在した当時の千總の町家に関する講演会を実施いたしました。

こうした活動はひとえに皆様からのあたたかいご支援とご協力により実現いたしました。心より御礼申し上げます。

昨今の急速な技術革新、気候変動や自然災害、戦争などによって社会が激しく揺さぶられるなか、人の尊厳と共に文化芸術の存在意義が守られることを切に願います。今後も、知と創造のプラットフォームを築き、文化的に豊かで持続可能な社会の実現へ貢献すべく活動を展開してまいります。引き続き、ご支援・ご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

目次

ご挨拶
千總文化研究所 代表理事　西村總左衛門 ―― 002

〈第1章〉結ぶ――千總の文化

千總文化研究所の活動方針 ―― 008

千總の有形・無形の文化財
千總コレクションについて ―― 010
千總の技術について ―― 018

〈第2章〉見つめる――研究活動

［研究活動 1］
12代西村總左衛門の活動に関する基礎的研究 ―― 024

研究ノート
12代西村總左衛門の略歴 ―― 028
小田桃子

研究ノート
近代の千總における参考資料収集 ―― 048
林 春名

コラム
シカゴ・コロンブス世界博覧会と千總 ―― 055
小田桃子

［研究活動 2］
真宗大谷派の染織品に関する研究 ―― 058

報告会
井波別院瑞泉寺所蔵法衣装束・荘厳具 調査報告会 ―― 074

研究ノート
賀茂別雷神社（上賀茂神社）競馬装束の蠻絵について ―― 077
林 春名

［その他の研究活動］ ―― 082

コラム
墨書のある小袖雛形本 ―― 084
林 春名

〈第3章〉繋ぐ──教育活動

［教育活動 1］

染織技術・染織文化を題材とした教育プログラム開発 ── 088

コラム

蒲池正太さんインタビュー ── 096

手描き友禅、色写し─珍友禅　職人歴：24年　担当：第2回「職人技」ってどんな技？

コラム

今井淳裕さんインタビュー ── 098

株式会社千總デザイナー　職歴：26年　担当：第5回デザイナーって何をする人？

［教育活動 2］

産学連携事業：千總所蔵の近代資料に関する調査 ── 102

報告会

産学連携スタートアップ事業　令和4年度成果報告会 ── 108

小田桃子

コラム

絵刷にのこる型友禅の記憶─型彫師 ── 110

小田桃子

［特別鑑賞会・講演会］

シリーズ・京都のなかの三条室町　第2回

千總・西村家の町家図面を読み解く ─近世京町家の造りと暮らし─ ── 112

講師：大場 修氏（立命館大学／京都府立大学）

コラム

写真でたどる社屋の変遷 ── 120

小田桃子

社会活動 ── 122

展覧会協力活動 ── 124

所蔵品の保存管理活動 ── 126

謝辞／研究所基本情報 ── 127

［研究活動 1］

12代西村總左衛門の活動に関する基礎的研究

［Research activities 1］

Basic Research on the Activities of Nishimura Sōzaemon XII

［担当者］
小田桃子、林 春名

［概要］

明治・大正・昭和時代に千總の当主であった12代西村總左衛門（1855〜1935）（以下、12代西村）。同人は、各種染織品の製造販売や貿易を行う傍ら、教育への支援ならびに共進会や組合などの団体活動にも携わり、近代京都の美術工芸業界の発展に寄与した。しかし、12代西村の事績は各種研究に点在し、全容は十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、千總の所蔵品の悉皆調査を通して、12代西村の事績を網羅的に解明する。その上で、社会的事象との関連や同人の思想の変遷を考察し、近代日本における12代西村の位置づけの再評価を目指す。

2022年度は、12代西村の活動期である1872（明治5）年から1935（昭和10）年の略年譜を作成し、さらに同時期に収集されたとする図書の悉皆調査を実施した。

前者では、463枚の賞状類を主体として、会計関係資料および当時の新聞や雑誌の掲載記事などの情報を補足した上で、12代西村研究の基礎資料としての略年譜を作成した。略年譜では情報の整理と活用促進を目指して、調査結果を4つの項目、すなわち12代西村の家族関係や個人の事績、事業展開等の会社および社員に関する事績、現存する所蔵品の出陳や購入歴、外部組織への寄附歴に分類した。そのうち前段3項目を集約した略年譜を当研究所のwebサイトにて公開し、本稿では前段2項目を抜粋して掲載した。さらに、昨年度調査で重要性が明らかとなったシカゴ・コロンブス世界博覧会に関して、所蔵の書簡や写真および新聞記事をもとに、当時の12代西村の活動について明らかにした。

後者では、友禅や刺繍および法衣類などの製作のために収集したとされる、493件の版本や近代書籍を調査した。それにより、近世近代の小袖雛形本や張交帖など、多岐にわたる図書を確認できた他、明治・大正期以降に作成された6冊の収集品目録との照合を通して、一部の図書や染織品の購入時期や購入先を明らかにした。その上で、当時の資料収集から現在千總コレクション形成に至るまでの過程の考察を行った。なお、今後の調査研究における図書の活用促進を目指して、本調査で確認した資料情報を集約し、新たな図書目録を作成した。

同様の調査は次年度以降も継続する。今後は、本研究で得られた成果をもとに、各事績と社会的事象や思想との相関性について検証する予定である。

2022年度調査の実施報告

小田桃子

本研究の背景

千總の12代当主・西村總左衛門（1855〜1935）（以下、12代西村）は、明治5年から昭和10年に活躍した染織事業家である。同人は、刺繍やビロード友禅染などを用いた美術染織品の大成者として知られる一方で、京都府画学校などの教育機関への支援や、京都美術協会などのさまざまな団体の設立や運営にかかわり、民間事業家でありながらも近代京都の美術工芸の技術や知識の底上げにも尽力した。しかし、12代西村の事績は各研究に点在しており、その全容は十分に解明されていない。

そこで本研究では、まず千總のさまざまな所蔵品の悉皆調査を通して、12代西村の事績の全容を明らかにする。そして、明治から昭和初期にかけての製品や同人の活動と、当時の国内外の社会的事象との相関性について考察し、近代日本における12代西村の位置づけの再評価を目指す。2022年度は、現存する12代西村宛の賞状類などをもとに、12代西村の略年譜を作成し、さらに所蔵図書の悉皆調査と過去の図書目録の調査を実施した。各調査の詳細については、別稿の研究ノートに譲ることとし、ここでは本研究課題における両調査の位置づけを確認したい。

ねらいと今後の展望

まず略年譜の作成は、12代西村に関する研究の基礎的資料の提供を目的に実施された。作成にあたり、千總所蔵の賞状類を核として、会計関係資料や戸籍資料、写真、書簡などの歴史資料を調査し、同人が西村家に養子入りした明治5年から昭和10年の間の事績を可能な限り網羅することを目指した。また補足的に当時の新聞や雑誌の記事を用いた。過去に主たる業績の紹介はされていたが、網羅的な略年譜は作成されたことはなく、今回が初めての試みである。非常に多くの事績を残し、複数の団体に関与した12代西村の各活動の背景を把握するために、本略年譜が有効に働くことと期待する。なお、詳細は別稿の拙著「12代西村總左衛門の略歴」を参照されたい。

一方の所蔵図書の悉皆調査は、略年譜のように全体を概括することから一歩進んで、特に12代西村の図案研究に注目している。そもそも12代西村の主たる功績のひとつに日本画家の起用による友禅図案の刷新が挙げられる。しかし、現存する千總の友禅裂には、海外からの影響を感じさせる図案や、百貨店の流行に呼応した図案など、絵画的な表現以外の多様な図案が散見され、数も多い。こうした図案は何を典拠としているのであろうか。千總の明治・大正期の収集品目録には、その当時の千總が、近世の版本や裂の貼交帖、海外の画集や雑誌など、さまざまな図書や資料を購入していたことが記録される。国内外に向けてあらゆる製品を企画するにあたり、図書資料が果たした役割は決して小さくなかっただろう。そしてその解明は、画家を起用する以外での、12代西村の時代の図案研究の実態とその変遷を明らかにすることに繋がると考えた。

そこで、本年度は所蔵図書の悉皆調査を行い、入手背景を把握するべく、明治・大正期の収集品目録の調査を行った。調査では493件の版本や近代書籍を確認し、その上で各種収集品目録と所蔵図書との照合した。それにより図書や染織品などといった参考資料の明治期以降の収集履歴の一端を解明するとともに、現在の千總コレクションの形成過程について考察を行った。他方で今後の所蔵図書の活用促進を目指して、本成果を踏まえた新たな図書目録を作成した。こうした成果は、千總が明治以降に国内有数の染織事業者であった点を考慮した場合、12代西村だけでなく、近代日本の服飾文化形成の研究にも貢献できるものと考える。なお、詳細は別稿の林春名著「近代千總の参考資料収集」を参照されたい。

今後も所蔵品の調査を継続し、12代西村の膨大な事績とその社会的事象との相関性を明らかにすることを目指す。最終的には12代西村を通して、同人が拠点とした京都の染織業界の近代日本における役割を、改めて考える機会となれば幸いである。

研究ノート

12代西村總左衛門の略歴

小田桃子

はじめに

12代西村總左衛門（1855〜1935）（以下、12代西村）は、明治以降に京都を拠点に活動した、染織事業家である。友禅製品の図案刷新や、刺繍やビロード友禅染を用いた美術染織品の大成に寄与し、他方で染織業に関する団体設立や若手育成への支援を通して、近代京都の美術工芸の技術や知識の底上げにも尽力したことでも知られている。

12代西村の基本書には、まず黒田譲著『名家歴訪録.上編』（1899年）および村上文芽著『近代友禅史』（1927年）が挙げられる。近年では、畑智子氏や並木誠士氏、青木美保子氏などにより調査研究[1]が重ねられており、また刺繍絵画や友禅製品などの各種染織品に関する事績については中川麻子氏や加茂瑞穂氏[2]などの研究に詳しい。さらに京都文化博物館で開催された「京の優雅〜小袖と屏風〜」展（2005年）および「千總460年の歴史—京都老舗の文化史—」展（2015年）[3]などを通しても、同人の事績の大概は明らかにされてきた。しかし、12代西村の事績は各研究に点在し、その生涯および背景にある思想や方針については網羅されておらず、且つ各事績と社会的事象との相関性が十分に論じられてきたとは言い難い。

こうした状況を踏まえて、12代西村の事績の全容を明らかにすべく、筆者は2020年度より調査を開始した。これまでに京都美術協会発行の雑誌における12代西村に関する記事を調査し、同会における活動を年表形式で明らかにした[4]。2022年度は、前年度までの調査を踏まえて、12代西村の生涯を可能な範囲で網羅することを企図して、略年譜を作成した。近代に活動した12代西村の事績の膨大さを考えると遺漏や誤認識が予想されるが、皆様の御叱正を仰ぐべく、本年度の成果として略年譜を本稿に掲載する。

実施概要

本略年譜では、千總における12代西村の活動期である1872（明治5）年から1935（昭和10）年を主な調査対象期間とした。その間の同人の事績につき、所蔵品や各種発行物から抜粋して構築した。所蔵品とは、主に賞状類、会計関係資料、戸籍資料、写真などの歴史資料であるが、ここで各資料について紹介する。

賞状類とは、博覧会などの受賞に関する賞状、ならびに委員などの役職に関する任命状、寄附や協力に対する感謝状、学校の卒業証書、文化財の鑑査状等である。本年では、1875（明治8）年から1928（昭和3）年までの間に、12代西村および西村家の家族に宛てて授与された463枚を調査対象とした。殆どの賞状は装丁されていない状態で保管される一方で108枚は両面手鑑帖に張り込まれ（Fig.1.1.1）、さらに他の8枚では各紙が額装され、その全てが博覧会および共進会の出品時に授与された賞状である。

Fig.1.1.1　賞状の手鑑帖（明治・大正時代）

研究ノート

近代の千總における参考資料収集

林 春名

はじめに

千總のコレクションのなかで大きな割合を占める一群として、近代に収集された参考資料がある。参考資料には近世の版本、小袖などの染織品、近代の印刷発行物、海外の出版物など多種多様な資料が含まれ、当研究所では現在その整理を進めている。整理を進める過程で明らかになってきた、近代の千總における参考資料収集の概要について、本稿でまとめておきたい。

「図書簿」について

参考資料の内訳は『図書部購入台帳』（Fig.1.2.1、通称「旧目録」、以下本稿において旧目録と呼称する）によって知ることができる。西村總左衛門南店図書部によって編集された参考資料の収集台帳で、1890（明治23）年から1936（昭和11）年までに収集された3089件の購入情報などが収録されている。さらに、この本には転記の元となった冊子が2冊存在し、合冊などの理由で旧目録で欠番となっている資料は転記元での確認が可能である。さらに、旧目録のうち友禅軸や染織品、貴重品はそれぞれ個別の目録に抜粋（ただし金額や購入年、購入先は写さない）・再編されており、友禅軸の目録2冊を加えて、現在遺る目録は全8冊となっている（Fig.1.2.2）。

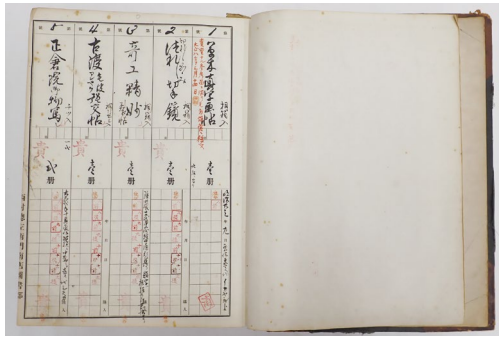


Fig.1.2.1　『図書部購入台帳』（旧目録）

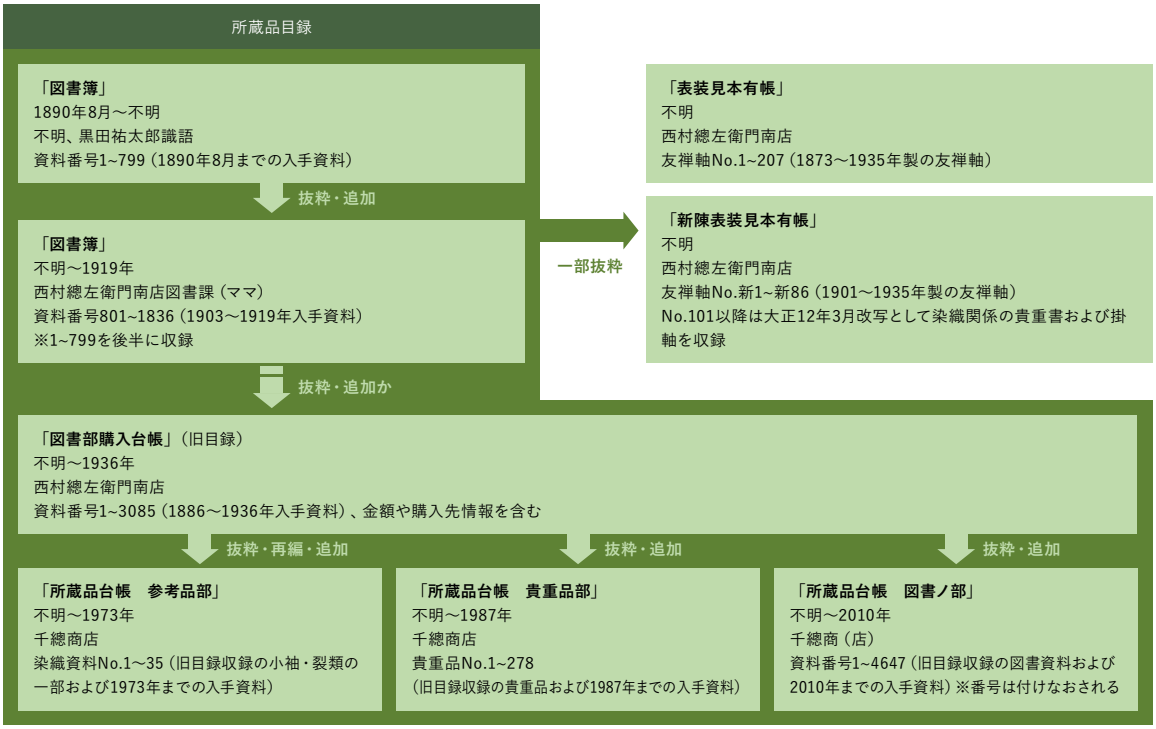


Fig.1.2.2　「図書簿」の変遷　※各項目は上から書名、編集期間、編者、収録内容の順に記載した。

コラム | Column

シカゴ・コロンブス世界博覧会と千總

小田桃子

シカゴ・コロンブス世界博覧会（World's Columbian Exposition、以下シカゴ万博）は、コロンブスのアメリカ大陸発見400周年を記念して、アメリカ合衆国イリノイ州のシカゴにおいて、1893（明治26）年5月1日から10月30日に開催された万国博覧会である。本博覧会において当主の12代西村總左衛門（1855〜1935、以下12代西村）は製品を出品した他、臨時博覧会事務局評議員を務め、さらに渡航総代として現地に派遣されていた[1]（Fig.1.3.1、Fig.1.3.2）。管見の限りで、12代西村の唯一の海外渡航の記録である。

そもそも渡航総代とは、閣竜（コロンブス）世界博覧会京都市出品事務所に設置された委員である。同事務所は博覧会の所轄庁と出品者の間に立ち出品事務を執り行い、そのなかで渡航総代は、民間事業者から選出され、渡航事務すなわち出品に係る事務ならびに現地における出品物の管理や販売および視察などを担った。なお、京都以外の地域にも同様の委員が設置されている。その設置背景には、民間事業者が海外との商売経験を重ねていた状況と、官民共同で博覧会に取り組む政府の狙いがあったという[2]。千總は1893年までに出品した5回の万国博覧会の全てで受賞しており、さらに海外からの貴顕の訪問や商会との取引があったことから、条件にかなったものと考えられる。

さて、京都の渡航総代は選挙で選ばれたが、当時は西陣派と呼ばれる西陣機業組合と貿易派の京都貿易商組合が激しく対立したようである[3]。12代西村は西陣派として、飯田新七の代わりに、候補者に擁立された。紆余曲折を経て、最終的に定員を1名追加した上で、西陣派より12代西村と丹羽圭介、および貿易派より直木栄助が選出された。その後、12代西村らは1893（明治26）年3月6日に離京し、横浜・サンフランシスコを経由して4月3日にシカゴに到着した。現地では丹羽と「トレリーエー、エーブ2604番」に滞在したという。なお、渡米直前に12代西村の実母の三国静枝が亡くなり、離京を2日後らせている[4]。他方で、実兄・三国直継の三男・直繁との養子縁組や緑綬褒章の授与なども重なっており、同年は12代西村において当主の立場が確立される年であったかのようにも感じられる。

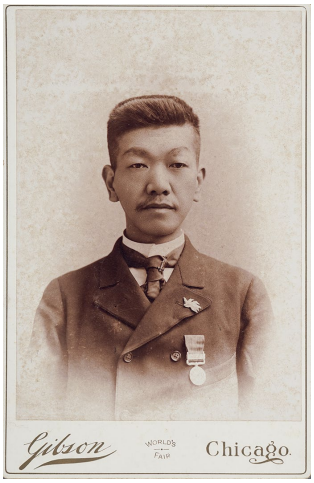


Fig.1.3.1　12代西村總左衛門（1893〔明治26〕年頃）

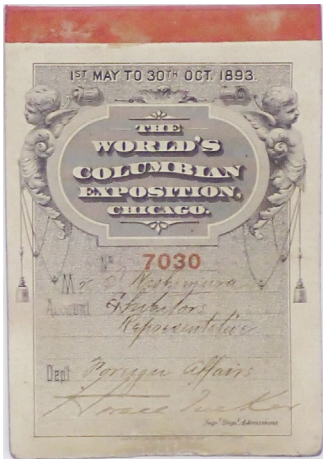


Fig.1.3.2　万博会場への入場パス：Account（役職）にExhibitors Representative（出品者代表〔渡航総代の意か〕）と記される

［研究活動 2］

真宗大谷派の染織品に関する研究

［Research activities 2］

Research on the Textile Products of the Ōtani-ha School of Shinshū Buddhism

［担当者］
真宗大谷派（東本願寺）所蔵　千切屋總左衛門製打敷・水引の調査研究：林 春名
井波別院瑞泉寺所蔵　法衣装束・荘厳具の調査研究：加藤結理子、林 春名、モニカ・ベーテ（中世日本研究所）、宮尾素子（中世日本研究所）、林 智子（京都府京都文化博物館）

［概要］
本研究は、真宗大谷派寺院に伝わる法衣装束および打敷類とその製作に関する資料の調査を通して、その仕様と使用目的に基づく体系的整理を行うことで、日本の染織文化の一端を明らかにしようとするものである。千總は、その前身である千切屋總左衛門が創業の室町期から大正期まで法衣や打敷を扱う装束師として活動しており、とりわけ真宗大谷派（東本願寺）の御用商人を務めていたことから、これまでに真宗大谷派姫路別院船場本徳寺や個人宅に伝わる法衣装束約200件を対象に調査を行ってきた[1]。

千切屋總左衛門は真宗本廟（以下、東本願寺）で使用された堂内装飾染織品の調製を行っており、一部の染織品の下図は現在でも千總に所蔵されている。本調査および研究では、東本願寺のご協力のもと堂内装飾品の実見調査を行い、下図との比較を行った。また、各作品に施された刺繍の技法を明らかにし、それらの分析を通して近代京都における刺繍制作の実態を解明する試みとした。

加えて、真宗大谷派井波別院瑞泉寺（富山県南砺市）所蔵の法衣装束・荘厳具および千總に遺る法衣関係資料を対象とし、調査および内容の分析を実施した。

今後も同様の調査を継続し、宗派における衣文化の特質および法衣商の活動実態の解明を目指したい。

本研究の一部は公益財団法人ポーラ美術振興財団 令和4年度助成を受けて実施された。

1. 「真宗大谷派の法衣装束・荘厳具の調査」一般社団法人千總文化研究所編『千總文化研究所 年報』第3号，一般社団法人千總文化研究所，pp.28-69，2022年

真宗大谷派（東本願寺）所蔵　千切屋總左衛門製打敷・水引の調査研究

林 春名

はじめに

千總の前身である千切屋は創業とされる1555（弘治元）年以来法衣商として活動しており、近世から近代には真宗大谷派（東本願寺）で使用された袈裟や打敷、水引などの染織品の調製を行っていた。打敷とは堂内や仏壇の卓の天板に挟んで使用する荘厳具（しょうごんぐ）（堂内装飾品）であり、水引は打敷の下に敷くように卓の正面および側面に巻き付けて使用するものである。一部の染織品の下図は現在でも千總に所蔵されており、それらの概要については『千總文化研究所 年報』第3号（2022年）に掲載されたとおりである。本調査および研究では、真宗大谷派のご協力を賜り打敷および水引の実見調査を行い、下図との比較を行った。また、各作品に施された刺繍の技法[1]を明らかにし、それらの分析を通して近代京都における刺繍制作の実態を解明する試みとした。

調査を行った堂内装飾品は1824（文政7）年から1901（明治34）年までの制作であった。千總に遺る決算表によると、1880（明治13）年頃から1897（明治30）年までの法衣の制作規模は概ね200円前後で推移しているが、1897年下半期から1900（明治33）年上半期までは10倍の2000円を超すまでに膨らむ。その背景には、禁門の変で焼失していた御影堂・阿弥陀堂の1895（明治28）年の再建、1898（明治31）年の慧燈大師（蓮如上人）四百年御忌、1901（明治34）年の御真影御遷座三百年紀念法会などに伴う打敷・水引の新調があったとみられる。

調査方法

所蔵者より資料を借用のうえ、調査を行った。調査対象資料は千總に下図が所蔵されている荘厳具に限った。全体および細部の撮影を行い、寸法・地組織・刺繍糸・刺繍技法などを記録した。図案については千總に所蔵されている下図と比較し、下図からの変更点を分析した。

調査結果

調査資料の概要は表1の通りである。なお、資料番号は所蔵元の整理番号（複数番号がある場合は数字の小さい方）を用い、資料名称は調査時に図様および加飾技法などから調査者が付した名称を用いた。

制作年代は1835（天保6）年から1901（明治34）年のものが確認された。いずれも平繍・刺し繍・まつい繍・駒繍の4種の刺繍技法が中心となり、その他に切押さえ繍、鎖繍、割繍、巻き付け繍などを補助的に使用する例がみられた。割繍は植物の葉や鳥の羽毛、切押さえ繍は葉と葉脈を表現する際に多くみられるなど、モチーフの形状や特徴によって技法が明確に選定されていることがわかった。下図からの変更が確認された資料も多数あり、千總所蔵の下図からさらに何段階かの図案の検討を重ね、最終的な構図が決定したことが推測される。

今回の調査資料中、江戸時代の作例は1件であった。No.137がそれにあたるが、こよりによる肉入れや玉眼が施されるなど、物理的な厚みをもつ刺繍である。モチーフの陰影は同系色のグラデーションではなく、異なる色相に切り替えて刺繍することで表現されており、現実的な形状や陰影を再現するという意味での写実性は失われている。龍の髭、鱗などにその方向性が顕著である。

No.137〈緋繻子地 雲竜図刺繍 打敷〉（部分）

同様の色彩表現はNo.7にみられ、No.142、143（後述）にも部分的にみられた。また、No.5は葉の色に階調をつけることで重なりや奥行を表現しているが、1枚の葉の中に階調を付けるのではなく、葉自体は単色のシルエットとすることで遠目にもモチーフの形態や位置がわかりやすくなってい

井波別院瑞泉寺所蔵　法衣装束・荘厳具の調査研究

加藤結理子、林 春名、モニカ・ベーテ（中世日本研究所）、宮尾素子（中世日本研究所）、林 智子（京都府京都文化博物館）

はじめに

真宗大谷派寺院に伝わる染織品の調査研究は2019年より継続して行っており、今回は3件目となる。千總の前身である千切屋總（惣）左衛門は江戸時代後期から真宗大谷派（東本願寺）の御用装束師として活動していたとみられ、法衣制作に関する下絵などの資料が現在でも千總に遺されている。しかし、具体的な製品の観点からは全体像が掴めておらず、断片的な情報として各地に保存される千切屋總（惣）左衛門製品の存在を知るのみであった。そこで、近世・近代の法衣装束の体系的整理を目的として開始したのが本調査研究活動である。調査には共同研究者としてモニカ・ベーテ氏、宮尾素子氏、林智子氏にご参加いただき、織組織や仕立ての仕様に関して探求を行った。

今年度は真宗大谷派井波別院瑞泉寺に所蔵される染織資料約300件を対象として調査を行い、幕末・明治期を中心とした真宗の法衣体系の一端を明らかにした。

なお、本調査研究および報告会は公益財団法人ポーラ美術振興財団令和4年度助成により行われた。

調査方法

法衣装束を中心とした染織品の実見調査を行い、調書と写真によって記録を行った。記録項目は資料名や形状、文様などの基礎情報の他、織組織の拡大写真をOLYMPUS製Tough TG-6、杉藤製ミクロメータスコープを用いて撮影することで、染織品を構成する糸の太さなどの情報を記録した。

調査風景

真宗大谷派井波別院瑞泉寺について

井波別院瑞泉寺は、富山県南砺市に所在する真宗大谷派の寺院である。1390（明徳元）年、本願寺5代・綽如上人による開基と伝えられ、北陸の浄土真宗信仰の中心として多くの門徒を抱え、越中における一向一揆の拠点ともなった[1]。別院とは、その地域の教化の中心道場として各地に建てられた寺院を指し、住職は法主（現在は門首[2]）が兼務するか、新門または連枝（法主の兄弟）が務める。そのため、現在同寺には、住職の法衣装束の他にも住職と血縁の近い法主や連枝の法衣装束が多く伝わっている。

また、同寺は周辺地域において聖徳太子信仰が盛んなことで知られる。井波別院瑞泉寺の歴史および太子信仰については、講演抄録「井波別院瑞泉寺と周辺地域の信仰—聖徳太子信仰を中心として—」を参照されたい。

実施経過

2022年6月27日から12月7日の期間に5回の現地調査を行った他、同年8月5日に市内の法衣店、8月30日に賀茂別雷（かもわけいかづち）神社（上賀茂神社）、12月23日に市内の装束店を訪問し、調査において確認された文様に関する調査を行った。

さらに、同年12月21日には瑞泉寺調査勉強会を開催し、真宗大谷派圓正寺 住職 山口昭彦氏、衣紋道山科流若宗家 山科言親氏を講師にお招きし、調査にて確認された資料に関する検討および意見交換を行った。加えて2023年3月20日に法衣装束勉強会を開催し、京都文化博物館 学芸員 西村剛氏を講師に招き、調査で確認された墨書の翻刻と千總所蔵の法衣装束関係文書の内容に関する考察を行う内部勉強会を開催した。

調査結果

調査において確認された資料は畳紙80点を含む319件326点であった。個別の資料ごとに調書を作成し、名称・制作年・使用される染織技法・制作した法衣商など情報の記録を行った。このうち年号が明らかなものは91件で、1832年から2003年までの資料が確認された。年代は畳紙の他、

報告会

井波別院瑞泉寺所蔵法衣装束・荘厳具 調査報告会

日時：2023年3月3日（金）午後2時00分～4時20分
実施形式：来場およびオンライン後日配信
会場：千總ビル5階ホール
参加者：来場21名、オンライン27名
主催：千總文化研究所

実施概要

松金直美氏（真宗大谷派教学研究所）を講師にお招きし、2023年3月3日に、一般に向けた調査報告会を千總本社5階ホールで行った。また、希望者には当日の記録動画を2023年4月10日から1週間オンライン配信した。

前半は当研究所の加藤より調査資料の概要を説明した。そして、瑞泉寺に多数の法衣装束・荘厳具が所蔵されることとなった背景を探るため、基調講演として松金直美氏（真宗大谷派教学研究所研究員）より聖徳太子信仰を中心とした井波別院瑞泉寺と周辺地域の信仰についてご講演を賜った。後半は調査報告として、当研究所の林より調査結果の報告ののち、共同研究者である林智子氏、宮尾素子氏、モニカ・ベーテ氏より、それぞれ過去の大谷派法衣装束調査の結果も交えつつ、瑞泉寺に遺された染織品の特質についてご考察をいただいた。また、当日の会場には千總の法衣関連資料を展示し、御装束師千切屋總（惣）左衛門の活動を紹介した。

報告会の様子

講演抄録「井波別院瑞泉寺と周辺地域の信仰―聖徳太子信仰を中心として―」

真宗大谷派教学研究所　研究員　松金直美先生

聖徳太子1400回忌を契機とする太子研究の進展

私は富山県の真宗大谷派の寺院に生まれ育ちました。真宗大谷派には聖徳太子信仰が僧侶・門徒に深く浸透しており、それぞれの地域的特徴を持ちながら各地で展開していますが、その盛んな地域のひとつとして、井波別院瑞泉寺のある富山県西部が挙げられます。2021年の聖徳太子1400回忌を控えて、その歴史を問い直す声が高まったのを受けて、私自身も幼い頃から身近な存在であった井波瑞泉寺を研究対象とすることになりました。

瑞泉寺周辺地域の聖徳太子信仰の実態に迫ろうと、2019年7月22日から24日にかけて、富山県西部においてフィールドワークを行いました。地域民衆の信仰を集めた両別院とその周辺地域の歴史を、聖徳太子信仰の観点から捉え直すことを課題としたものです。

井波別院瑞泉寺の由来と法宝物

『勅願所 瑞泉寺来由略記』によりますと、瑞泉寺は明徳元（1390）年に後小松天皇の勅願所として、本願寺5世綽如上人によって建立されたと伝わります。朝廷に異国から難解な手紙が届いた際、碩学の仏者や儒者の誰も読めなかったところ、綽如上人が誤りなく読み、それに対して執筆した返書もすばらしかったため、天皇は感嘆。さらに『大無量寿経』を進講した功績によって、聖徳太子二歳像と聖徳太子絵伝8幅が授与され、越中国山斐郷に寺院を創建したいという綽如上人の申し出も勅許された、というものです。仏閣建立の際に霊水が湧出したため、瑞泉寺という寺号が許され、勅願所となりました。

太子堂には後小松天皇から授与された聖徳太子二歳像（南無仏太子像）が安置されています。聖徳太子二歳像

研究ノート

賀茂別雷神社（上賀茂神社）競馬装束の蠻絵について

林 春名

賀茂別雷神社競馬装束

真宗大谷派井波別院瑞泉寺所蔵の七条袈裟に、特異な文様がみられるものがある（Fig.1.4.1、以下瑞泉寺図）。その文様は、円形の内部上半に雲、下半に流水が表され、その中央に緑色のワニのような姿の獣が配置されたものである。2022年度に行った真宗大谷派染織資料に関する一連の調査のなかで、本図の源泉が賀茂別雷神社（以下、上賀茂神社）の競馬装束の文様にあることがわかった。

上賀茂神社の競馬神事は5月5日の恒例行事であり、2023年で930周年を迎える。元は宮中の武徳殿において行われた競馬が移されたものであり、騎手である乗尻は右方と左方に分かれて境内で馬を出走させ、その速さを競う。右方と左方はそれぞれそろいの舞楽装束を着し、左方の袍は紅地の無紋であるが、右方の濃灰色の袍の両袖には蠻絵[1]が織り表される（Fig.1.4.2-3、以下競馬装束蠻絵）。蠻絵とは鳥獣を円形に配した文様で、平安時代の近衛府の武官装束に表された紋である。競馬装束蠻絵に表された獣は現実に存在する動物がモデルとは言い難く、全身は萌黄色で、両肘、両膝、腰部、尾部の6ヵ所に赤い点が表された、ワニや河童に似た姿である。競馬装束蠻絵の図様は左右でわずかに異なっており、右袖は獣が向かって左を振り向き、阿形に開かれた口からは炎を出し、頸部に円文が表される。左袖は獣が向かって右を向き、口は閉じて吽形をなし、頸部には三日月形の文が配される。すなわち、左右で阿吽かつ日月の一対として表現されていると解釈される。

この獣の正体については、所蔵元である上賀茂神社にも文献資料が遺されておらず、また社外の装束に転用された例も瑞泉寺資料のほかは確認されていない。一般財団法人賀茂県主同族会　堀川潤理事長によると、装束が劣化するたび、装束自体を見本として新たな装束を調製しているという。

Fig.1.4.1　七条袈裟（真宗大谷派井波別院瑞泉寺蔵）

Fig.1.4.2　競馬乗尻装束（賀茂別雷神社蔵）左袖紋
画像：賀茂別雷神社提供

Fig.1.4.3　同前右袖紋
画像：賀茂別雷神社提供

コラム | Column

墨書のある小袖雛形本

林 春名

小袖雛形本（以下、雛形本）とは、その名の通り小袖の模様の雛形（見本）を製本したもので、1666・67（寛文6・7）年の『御ひいなかた』をはじめ江戸時代を中心に多数出版された。千總には、再版も含めると40種を超える雛形本が所蔵されており、このうちいくつかに、墨書が加えられたものがある。

『梅印御召惣模様新雛形』（Fig.1.5.1）もそのひとつだが、出版年は記されておらず、タイトルも出版当初のものではない。掲載されている図案に着目すると、全40図中約4分の1が17〜18世紀前半に流行した立木模様[1]、約4分の1が細かなモチーフを小袖全体に散らした総模様で、その他の図案は風景や植物などを繊細に描写した江戸時代後期によくみられる文様形式である。すなわち、収録されている小袖模様の流行を勘案すれば、この雛形本は18世紀半ばごろの出版と想定できる。本書の巻末に、旧蔵者による墨書がある。

此御召雛形、何方様へも参り候共、
早速御戻シ可被下候、以上
　　~~寺町三條下ル町~~
　　~~長谷河北店~~
（翻刻は旧字体を新字体に改め、適宜句読点を補った。以下同様。）

Fig.1.5.1　『梅印御召惣模様新雛形』巻末、出版年不明

ここには、この雛形本が誰のもとへ渡っても、すぐに持ち主である長谷河北店へ戻すようにとの注意書きが付されており、呉服店や染屋が持ち主として想定される。この本は呉服の注文客への貸し出し用として使用され、より小袖の制作現場に近い位置で実用的に機能していたものだったのであろう。では、その中に掲載されている図案はどのように人々に活用されたのだろうか。

同じく呉服店で使用されたとみられる雛形本『四季粧』には、掲載された図案の使われ方がわかる序文（Fig.1.5.2）がある。

右模様或ハ或ハ、多少高低等何連ニ而も御好ニ順て
出来可仕候、宜御注文御指図被遊可被下候奉希候

Fig.1.5.2　『四季粧』序文前半、出版年不明

つまり、この雛形本に掲載されている図案は、注文者の好みにしたがって自由に文様を増やしたり減らしたりするというアレンジを加えたうえで小袖に仕立てられたのである。雛形本の図案は絶対的なものではなく、あくまで注文者の好みが中心であり、それを呉服店や染屋へ伝達する媒体として雛形本が機能していたことが読み取れる。

序文はさらにこう続く。

［教育活動 1］

染織技術・染織文化を題材とした教育プログラム開発

［Educational activities 1］

Development of and Educational Program on Textile Techniques and Textile Culture

［担当者］
加藤結理子

［概要］

「VUCA」と称される先が見通せず、さまざまな課題が山積する社会において、次の時代を担う子どもたちのためにどのような教育が必要か、各界を挙げての議論が進められている。人間とは何か、技術や文化は何のために存在し、何を創造すべきなのか、といった解のない問いに向き合うためには、幅広い知識と視野、論理的思考力と想像力の育成が求められる。

当研究所は、2021年度より染織技術・染織文化を題材とした教育プログラム開発を進めている。これは、千總の有形・無形の文化財に内包される学問分野と人間の創造性の有り様を、次世代の教育教材として再構築する試みである。

2022年度は、中学生向け課外プログラムの実施および学校授業における探求活動のための題材提供を行った。

中学生向け課外プログラムは、当研究所が主催し、各分野の専門家や技術者を講師として招き、京都市教育委員会のもと実施された。着物にまつわるさまざまな事象を学校で学ぶ教科と結びつけて、中学生が着物を多角的かつ科学的に探究することを目的とした。

題材提供は、函館工業高等専門学校ならびに大阪教育大学附属天王寺中学校に対して実施された。函館工業高等専門学校へは、千總が手がけてきた染織品に関する講義と「桶出し絞り」と呼ばれる染色技法の解説を行った。大阪教育大学附属天王寺中学校においては、美術科と理科の授業に着物のデザイナーと染色の職人を講師として派遣し、実習のための着物、染色見本、染色材料と道具などの提供を行った。

今後も実証的研究を重ね、子どもたちの創造力や思考力を育む教育プログラムの構築を目指す。

本事業は、日本STEM教育学会拡大研究会、第23回大学教育研究フォーラム、岡山大学大学院「CRE-Lab.創造性フォーラム2023」ならびに当研究所主催の事業報告会にて発表された。

中学生向け課外プログラム「きもの科学部」の実施概要

加藤結理子
下郡啓夫（函館工業高等専門学校）

はじめに

日本の着物は、長い歴史のなかで育まれた多様な技術と文化を含み、西洋のファッションにも大きな影響を与え、今なお伝統芸能や伝統儀礼だけでなくファッションとしても親しまれている他に類を見ない民族衣装である。したがって、一般的に着物の特異性を語る場合、衣装としての歴史、日本文化における色や模様、技術や産地といった文化的・社会的枠組が焦点となる。

しかし、着物の成り立ちを紐解くと、その根底にはさまざまな学問分野がある。色や染料の原理は化学、植物模様や幾何学模様は農学や数学、文芸を主題としたモチーフは文学、染色技術の材料や道具の産地は地理学にもつながり、子どもたちが学校で学ぶ国語、数学（算数）、理科、社会にその基礎がある。そして言うまでもなく、美術、技術、家庭科の要素が多分に含まれている。

「きもの科学部」は、着物を構成する要素を中学校で学ぶ教科に分解し、さらに教科を横断して“着物を科学的に探究する”ことをテーマとしたプログラムである。

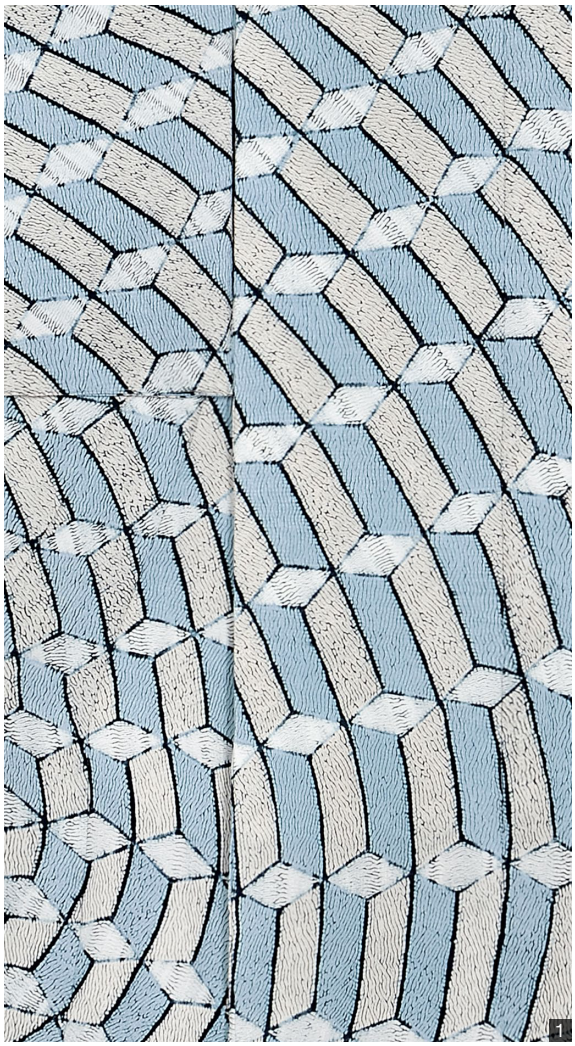
プログラムは、下郡啓夫（函館工業高等専門学校教授）との共同研究として構成され、京都市教育委員会（以下、教育委員会）の協力の元、農学、文学、化学分野の専門家、着物の製作に携わるデザイナーや技術者と共同で、子どもの想像性・創造性の育成が目指された。

なお本プログラムは、教員の長時間労働、指導負担が課題となるなか、多様な子どものニーズへの対応策として、部活動の地域移行の一環として文化庁が進める「令和4年度地域活動推進事業および地域文化倶楽部（仮称）創設支援事業」のもと実施された。

プログラム実施体制

当研究所がプログラム案を作成し、各回に講師として招いた専門家・研究者と共に検討を重ね、スライド資料やワークシートなどを作成した。実施時期や体制、学習指導要領との整合性などについては教育委員会に事前に指導を仰いだ。

【講師】
各回ワークショップ：下郡啓夫（函館工業高等専門学校教授、専門分野：教育工学）
第1回：小林淳哉（函館工業高等専門学校教授、専門分野：無機材料学、文化財）
第2回：蒲池正太（手描き友禅職人、専門分野：染色）
第3回：木島温夫（滋賀大学名誉教授、専門分野：農学、園芸）
第4回：横山恵理（大阪工業大学准教授、専門分野：日本文学）
第5回：今井淳裕（株式会社千總製作部デザイナー、専門分野：染織デザイン）
【参加対象者】京都市内の中学校・義務教育学校（後期課程）の1（7）年生〜3（9）年生
【定員】20名程度
【参加費】無料
【実施日】2022年10月22日（土）、2022年11月5日（土）、2022年11月20日（日）、2022年12月4日（日）、2022年12月17日（土）、計5回
【実施時間】午前10時〜正午（途中休憩あり）
【開催場所】千總本社ビル（京都市中京区御倉町80）
【参加者の移動手段】公共交通機関、または保護者による送迎
【告知方法】教育委員会が、地域の市立中学校を訪問し、チラシを配布する他、子ども向けイベント情報誌ならびにインターネット上の情報サイトへ「きもの科学部」の情報を掲載
【申し込み方法】千總文化研究所ウェブサイト内イベントページから申し込みフォームに入力。5回全てのプログラムへの参加を推奨しつつ、自由選択とした。参加者の保護者の参観は自由とし、参加者の所属中学校の関係者の参観希望者を、教育委員会を通じて募った。
【申し込み者数】16名（所属校：10校）、【学年構成】1（7）年生：6名、2（8）年生：6名、3（9）年生：2名【各回の参加者】第1回9名、第2回8名、第3回11名、第4回10名、第5



1. 訪問着（部分）（千總製）
2. 紫縮緬地杜若と葵に胡蝶文様小袖（部分）　江戸時代（19世紀）
3. 振袖（部分）（千總製）
4. 藍平絹地宝袋亀甲文様夜着（部分）　江戸時代（18世紀）

コラム | Column

蒲池正太さんインタビュー
手描き友禅、色写し一珍友禅　職人歴：24年
担当：第2回「職人技」ってどんな技？

講義と実演の中でお話しいただいたことをベースにしながら、改めて「職人技」についてお尋ねし、子どもたちとの交流を通して感じられたことをお話しいただきました。

手描き友禅を手掛ける上で、大切な視点を教えてください。

まず、企画の意図を理解することです。デザイナーがどのような着物を作ろうとしているのか、できる限り具体的に完成のイメージを共有することが大切です。ビジュアル資料や配色見本はデザイナーから受け取りますが、そこから想起されるイメージが複数ある場合、言葉から絞りこむ必要があります。例えば、「派手すぎない」という言葉は、「色を渋くする」のか、「色の組み合わせや表現によってしっとりとした印象にする」のかといったように、微妙に異なるニュアンスが含まれていると思います。イメージを形にする上で大切な視点です。

それから、配色見本をもとにどの色をどの部分にどれくらいの面積でどのように染色するのかを考えるのも手描き友禅職人の仕事です。どんなに小さな葉っぱの一枚を染める時も、着物の完成図が頭にあります。着物が完成した時のイメージをできるだけ正確に細部まで想像することが必要です。そして、頭の中にある完成のイメージに近づけるために、どういう仕事をするか、どこをどのような色で染めるか、色を整理して検討し、細部を積み重ねることで全体が出来上がります。

着物は、およそ13メートルの反物を、身頃や袖、衽、襟などいくつかのパーツに分けて裁断し、仕立てられます。手描き友禅の工程では、下絵を生地に描くために一度着物の形に仮仕立てを行いますが、染色をする際は再びパーツごとの生地に分かれます。パーツに分かれた生地に染色していても、頭の中では完成した時の模様のつながりを意識しながら作業しています。

全体と部分と細部を同時に考えること、このことも「職人技」のひとつだと思います。

染色をする順番や色の配置はどのように決めているのでしょう？

染色は、絶対にこの色を使うと決めている大切な箇所から始めます。完成した時に全体のポイントとなる部分から染めて、それから周りを調整するようにしています。

色の配置も重要です。着物の中で強調する部分と抑える部分があるので、明度や彩度、補色の関係性などを考えています。単純に濃度や彩度が高いとか、黄色より赤色の方が色の印象が強いなどということではなく、着物の地の色や模様の縁取り、隣の色同士のコントラスト

手描き友禅の作業に取り掛かる蒲池さん

使用する色は染料を混ぜて1色ずつ生成する。デザイナーから受け取った配色見本と見比べながら色を決める

函館工業高等専門学校における「桶出し絞り」を題材とした探求授業

加藤結理子
下郡啓夫（函館工業高等専門学校）、西井美佐子（女子美術大学）

【授業名】グローバルケーススタディ
【対象者】函館工業高等専門学校専攻科1年生19名
【授業実施期間】2022年10月17日～2023年1月30日　全11回　午前10:45～午後12:15
【題材を提供した授業実施日】2022年10月24日（月）、11月7日（月）
【提供内容】
・千總が江戸時代から現代に至るまで手がけてきた染織品とその技法についての講義
・絞り染の一種である「桶出し絞り」の実物の道具および製作記録動画を用いた技法解説

【事業概要】

昨年度に引き続き、技術革新と新しい社会価値の創造をテーマとする下郡啓夫教授の講義「グローバルケーススタディ」において、染色技術を題材とする授業の枠をご提供いただいた。共同研究者の西井美佐子氏には、当研究所が提供すべき題材や染色技術の解説手法などについて指導いただいた。

今年度の授業では、探究の対象を「桶出し絞り」に限定し、受講者の主体的な発見力や想像力の育成に主眼を置いた。「桶出し絞り」は着物に用いられる伝統的染色技法のひとつで、着物の模様を多色に染め分け、生地に独特の風合いを創り出す。具体的には、上下に蓋がある檜の桶を使用し、染める部分をその桶の外縁に沿って細密に固定し、染めずに残す部分を桶の中に入れる。そして、桶の上下の蓋を固く緊縛し、桶自体を染液につける技法である。昨今の着物需要の減少にともない、桶や針などの道具の生産者、染色の技術者の減少、高齢化が進み、技術の継承が難しくなっている。

受講者にとって、「桶出し絞り」は決して身近な題材ではないが、自身がまだ認知していない事象に自分ごととして向き合い、自ら問いを立てる姿勢を身につけることが本授業におけるひとつのねらいであった。「桶出し絞り」の技法解説にあたっては、職人の一つひとつの作業、用いられる道具について、どのような理由でその手順や道具が選択されるのかに着目するよう、受講者を促した。

その上で、受講者は自分自身の興味関心事を書き出し、「桶出し絞り」と自身の接点や距離感を整理した。道具の構造、材料、着物のデザインなど「桶出し絞り」を構成するさまざまな要素の中で自分は何に関心があるか、また技法の魅力を他者に伝えるにはどのような方法があるかについてグループワークによる検討に取り組んだ。

デジタル情報時代にあって、アナログな技術の意味を考えること、機械に代替不可能な人間の創造性を学ぶことが、予測不可能な社会を生きる視座につながることを願う。

本事業は、第23回大学教育研究フォーラムにて発表された。

大阪教育大学附属天王寺中学校における教科横断型の創造性教育モデル

加藤結理子

【担当者】

大阪教育大学附属天王寺中学校　宣昌大（美術科）、堀井久嗣（理科）、伊藤博紀（国語科）、安福華世（家庭科）

【対象者】

2年生　144名

【授業期間】

2023年2月20日～2023年3月6日　全9回

【題材を提供した授業実施日と教科】

2023年2月20日（美術科・理科）、2月21日（理科）、2月22日（国語科）、2月27日（美術科）

【提供内容】

美術科：着物デザイナーによる着物製作に関する講義
　　鑑賞・観察のための振袖
　　手描き友禅、手捺染、インクジェットプリントによる染色見本
理　科：手描き友禅職人による染色に関する実演と講義
　　染色に用いられる染料、絹地、刷毛、伸子などの材料・道具類
国語科：着物製作における配色の工程で用いられる色見本帖の写真

【事業概要】

本事業は、大阪教育大学附属天王寺中学校と岡山大学大学院教育学研究科附属国際創造性・STEAM教育開発センター（CRE-Lab.）が共同開発を進める教科横断型の創造性教育モデルの授業への協力依頼により実施された。

美術科、理科、国語科の担当教諭と打ち合わせを重ね、提供内容を決定した。本事業では、座学による知識の享受ではなく、伝統的染色技術の担い手との交流や技術の実習、完成した着物の鑑賞に加え、道具や材料などを実際に使ってみるといった、五感を使って創造的に伝統文化に触れることに力点が置かれた。

題材を提供した美術科、理科、国語科では、着物製作と色について体系的に学ぶため、3教科を横断して構成された。美術科では、手描き友禅の技術を用いて製作された着物を観察した。理科では、手描き友禅の染色の工程を担う職人の実演と講義を受けた上で、実際に染料の配合の実習を行った。そして国語科では、色と色名の関係が考察された。

また当研究所から教材の提供は行われなかったが、本事業では家庭科において着物の素材とデザインとTPOについての授業が行われた。

学習者は、着物や染色技術を通して、何気なく見ているものや色に対する新しい見方や考え方を身につけ、見えているものや感じていることと言葉との関係性を捉え直す機会となった。

本事業は、CRE-Lab.が主催する国際フォーラムにて大阪教育大学附属天王寺中学校より発表された。

［教育活動 2］

産学連携事業：千總所蔵の近代資料に関する調査

［Educational activities 2］

Industry – Academia Collaboration Project: Survey on Late Modern Period Documents of the Chiso Collection

［担当者］
小田桃子、増渕麻里耶（京都芸術大学）、
木村栄美（京都芸術大学）

［概要］

明治から昭和初期にかけて国内有数の染織事業者のひとつであった千總には、当時のものづくりや人的ネットワークに関連する歴史資料が多数現存する。当研究所は、2021年度から京都芸術大学と株式会社千總との覚書のもとに、当該資料の解明および文化財保護の専門家育成を掲げ、同学歴史遺産学科と調査を遂行している。2年目となる2022年度は、明治末期から昭和初期につくられた型友禅関連資料の絵刷の調査、ならびに12代当主の西村總左衛門に関係する書簡の解読を、正課授業の一環として実施した。

絵刷調査では、2021年度に引き続き、同学科の増渕氏ゼミ所属の学生を中心に、絵刷の撮影及び調書の作成が実施された。絵刷は1冊につき約100枚の絵刷本紙が綴じられており、各絵刷本紙の表面には文様が刷られ、裏面には日付や人名、注文主などを含む墨書が記されている。調査では各本紙の表裏を撮影し、調書作成では、千總の製品を選定した上で、各本紙の採寸や墨書の解読を行った。2022年度は、4冊分（432枚）の本紙を撮影し、184枚の調書を作成することができた。さらに、墨書の解読により、現時点での絵刷の制作年が明治43年から大正14年である点、記された計58名の人名のうち6名が型紙彫刻師である点などを確認した。

書簡調査では、12代西村總左衛門に関係する8件10通の書簡を翻刻した。そのうちの3件は授業の一環で実施され、同学科木村氏ゼミ所属の学生が、実際の資料を調査した上で、解読した。8件のうち、1件はシカゴ・コロンブス世界博覧会の際に12代西村總左衛門がしたためたものだが、その他の7件は実父の三国幽眠、榊原文翠や久保田米僊などの画家や、立見尚文といった軍人が12代西村總左衛門に宛てたものであった。解読を通して、シカゴ・コロンブス世界博覧会開催時における12代西村總左衛門の活動の他、これまで明らかにされてこなかった人的ネットワークの一端を示すことができた。なお、本年度の成果は、2023年4月29日に開催された京都芸術大学主催「産学連携スタートアップ事業令和4年度成果報告会」にて発表された。

2022年度調査の実施概要

小田桃子

はじめに—調査のねらい

当研究所では、2021年から京都芸術大学と株式会社千總（以下、千總）との覚書のもとに、美術工芸品に関わる千總所蔵の近代資料を調査している。本調査は同学の正課授業の一環で行われ、教員および当研究所の指導のもとに学生主体で遂行される。本産学連携事業を通して、歴史資料の全容や価値を明確化するとともに、学芸員や文化財保護に係る専門家を志す若手の育成を目指している。

2年目となる2022年度は、昨年度から継続している絵刷冊子147冊に加え、明治・大正期の千總当主の12代西村總左衛門に関する書簡を調査対象に含めた。前者では文化財調査に欠かせない資料撮影と調書作成の実習、後者では歴史研究に必要な崩し字の翻刻と解読の学習を目的としており、それぞれ文化財科学が専門の増渕麻里耶氏の指導する学生と、歴史学が専門の木村栄美氏のゼミ生が担当した。各調査は来年度以降も継続されるために、本稿では中間報告として本年度の実施概要を報告する。

絵刷調査

絵刷とは、型友禅染に使用される型紙によって文様が紙に刷り出された資料である。一般的には、型紙の彫り具合の確認や文様の見本に用いられたと言われ、いわば製作過程で生み出される“ものづくり資料”である。近年、千總の友禅製品のものとされる絵刷冊子147冊（約14700枚）が寄贈された。明治末期以降、千總は型友禅製品を生産する国内有数の企業であったが、その実態は充分に解明されているとは言えない。ところが、絵刷には、表面に文様、裏面に人名や制作年月日、注文主などの墨書が記され、当時の型友禅製品の成立背景の一端を示す。そこで本調査では、そうした情報を集約したアーカイブの形成を最終的な目標に掲げ、各絵刷本紙の表裏を撮影し、千總製品の絵刷を対象に採寸や墨書解読を伴う調書作成を実施する。なお、絵刷の概要および2021年度の調査については、当研究所年報4号に掲載の拙稿にて報告した。

2022年度の調査は、増渕麻里耶氏および同学日本庭園・歴史遺産研究センターの近藤眞音氏の協力により、下記の日程で前後期併せて10回実施された。

前期実習：2022年6月23日、30日、7月7日、14日、21日
（参加者：歴史遺産学科所属の3回生5名、修士1回生1名）
後期実習：2022年10月13日、20日、27日、11月10日、17日
後期講義：2022年10月5日、11月3日
（参加者：歴史遺産学科所属の2・3回生11名、修士1回生1名）

実習に先駆けて、当研究所では資料の歴史に関する講義ならびに資料の取扱い方法および調書作成について指導し、大学では文化財の撮影に関する講義と実習を行った。また前期の終わりには、絵刷への理解を深めるために、学生が選んだ任意の絵刷表面の文様につき、その意味や関連する風習を調査して発表する会を設けた。2022年度の調査では、4冊分（432枚）の本紙を撮影し、184枚の調書を作成した。

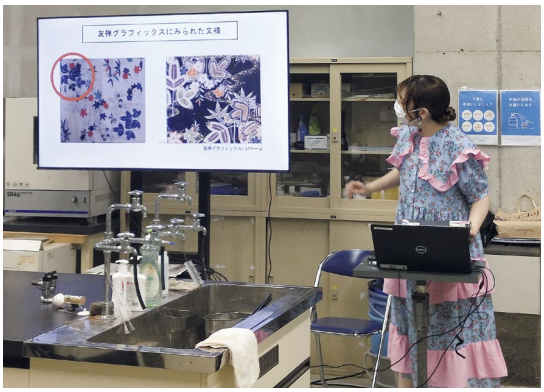
他方で、2021・2022年度に調書を作成した248枚の絵刷本紙の裏面に記された墨書の解読を、当研究所で行った。墨書は、情報の過不足はあるものの、概ね以下の通りの内容を含んでいる。即ち、①日付：制作年月（日）、②番号、③文様名称、④1〜2名の人名（人名1・2）、⑤工場名（人名3）、⑥用途先（百貨店・販売会など）である。

現時点では、墨書の解読を含む調査が全紙約14700枚のうちわずか248枚のみに留まるために、絵刷資料全体を概括できないが、今年度までで明らかとなった内容を下記のとおりに報告する。

- 本絵刷は、明治43年（推測を含めると明治39年）から大正14年に制作されたものを含む。
- 文様には、伝統的な染織品の文様がある他、表現派や光線式、ヒユウザン式といった百貨店などが主導した社会的な流行の影響が見られる文様も存在した。他方で、クッションなど、きもの以外の用途の絵刷もみられた。

授業風景：撮影

授業風景：調査



授業風景：学生による発表

絵刷表面例（冊子2-30）

絵刷裏面例（冊子2-30）

報告会

産学連携スタートアップ事業　令和4年度成果報告会

小田桃子

日時：2023年4月29日（土）午後1：30～4：30
実施形式：来場およびオンライン
会場：京都芸術大学人間館　NA102教室
参加者：来場15名、オンライン22名
主催：京都芸術大学芸術学部歴史遺産学科／日本庭園・歴史遺産研究センター歴史遺産研究部門
共催：千總文化研究所

2022年度に実施した産学連携事業に係る、絵刷調査と書簡調査の中間報告会が、京都芸術大学歴史遺産学科主導のもとに実施された。

報告会は、第1部「型友禅にまつわる人と物」と第2部「12代当主西村總左衛門の交流と活動」に分けられ、各担当者から実施概要を報告し、加えて関連資料の調査結果を発表した。

第1部では、当研究所の小田より2021・2022年度の絵刷調査の概要説明とともに、248枚の絵刷本紙の集計結果の報告を行い、そのなかで絵刷に記録された人名、とくに型彫師について考察した。また本年度学生グループにより実施された3冊の絵刷の調査の詳細と考察については、学生が研究発表ポスターを作成し、当日会場に掲示した。関連資料の報告として、根岸カノン氏（京都芸術大学大学院修士1年）から自然科学的手法を用いた絵刷の色材分析について、さらに同学科の増渕麻里耶准教授より絵刷のエンドプロダクトである友禅裂の染料分析について、それぞれ発表が行われた。

第2部では、木村栄美准教授が本年度の書簡調査の実施概要の報告とともに、書簡を通じて明らかとなった12代西村總左衛門と画家や軍人との交流について考察した。また3名の学生代表より、授業で解読した3枚の書簡の翻刻を紹介し、書簡の歴史的背景の考察を行った。さらに、関連資料の調査報告として、授業で解読した3枚の書簡の内、1893（明治26）年に記された、シカゴ・コロンブス世界博覧会に関する「在米西村總左衛門書簡」および「口演（御悔　榊原長敏書簡）」等を取り上げ、同博覧会における12代西村總左衛門の活動について、当研究所の小田より発表した。

調査対象となった資料である絵刷や書簡は、完成した製品や当時の新聞記事等からは知ることのできない、明治・大正期における千總の技術や人間関係を現在に伝える。本会を通して、そうした資料の存在を周知し、その価値について、ともに考える機会となれば幸甚である。

会場風景

コラム | Column

絵刷にのこる型友禅の記憶—型彫師

小田桃子

千總所蔵の絵刷の裏面には、製品の成立背景に関する墨書が記されている（Fig.2.4.1）。具体的には、文様名、制作年月日、注文主や販売会名称などの用途、そして人名である。各紙には1〜3名の人名が記されており、昭和期の絵刷などを参考に紐解くと、それぞれ染工場、考案家、型彫師に分類できる。染工場とは染色を行う工場であり、例えばかつて東福寺周辺にあった千總友禅工場の通称「二ノ橋」などが記される。考案家とは図案の考案者と推測される。そして、型彫師は型友禅のための型紙を彫る彫刻師を意味する。そこで、本稿では絵刷を通して、千總の友禅製品に関係した型彫師を紹介する。

2022年度までの絵刷調査で確認した人名を、『京都染業家名鑑』（日本染織新報社, 1926年）と照合したところ、山田他二郎、中野音吉、山田源三郎、内藤長三郎、西田朔次郎、三輪弥三郎の6名の型彫師を確認することができた。いずれも京都市内に住む職人である。そのなかで、山田他二郎は最も多くの絵刷にその名が記されている。山田が手掛けた文様を見ると、格子や古典的な唐草文のような規則正しい幾何学的なデザインもあれば、墨画淡彩の雰囲気を再現した梅図（Fig.2.4.2）や、更紗や油絵などの異なる素材の質感を表した文様まで、実に多種多様であることがわかる。神谷栄子氏の調査報告「明治の型友禅」（『Museum』69号,東京国立博物館, 1956）によると、山田は特に難しい人物模様も精巧に彫ることのできる、数少ない腕の立つ職人として千總社内で評判であったという。当該報告でもとり上げられているが、山田が手掛けた人物模様の友禅裂〈浮世絵三美人文様〉が千總に現存している（Fig.2.4.3）。本作は、勝川春章筆〈習字図〉（18世紀, 東京国立博物館）を、羽二重地に刷り出した友禅裂である。色はもちろんのこと、面相や髪の毛描き、衣服の模様などの詳細まで忠実に再現しようとしている。それだけでなく衣服や肌、硯などの描写物によって使い分けられている輪郭線の表現の差も表されており、原画の持つ繊細な雰囲気を残している。型紙が現存しないため実際の製作工程は定かではないが、こうした表現は摺りの加減もさることながら、いかに型紙を分け、且つ彫るかによっても左右される。

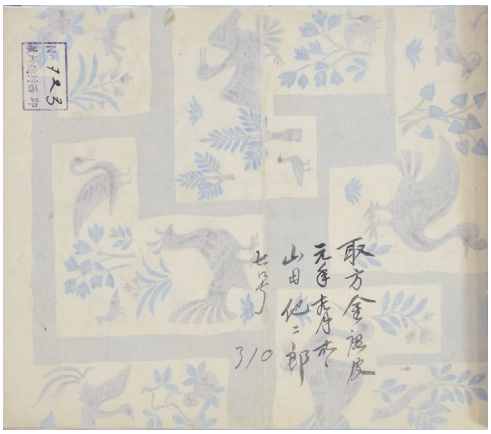


Fig.2.4.1　裏面の墨書例　1912（大正元）年1月30日

Fig.2.4.2　梅　1914（大正3）年11月

［特別鑑賞会・講演会］

シリーズ・京都のなかの三条室町　第2回

千總・西村家の町家図面を読み解く ―近世京町家の造りと暮らし―

［Special Exhibition and Lecture］

Lecture Series: The Sanjō-Muromachi area in Kyoto (Second Lecture)

Architecture and Life in the *Kyomachiya* of the Early Modern Period: An Analysis of the Drawings of the Machiya of Chiso / the Nishimura Family

［概要］

古来、千總の主な活動拠点である三条室町。千總には、土地や建物または行事など、町に関係する資料が現存しており、近世に千總の当主が御倉町の政にも関与していたことが明らかにされている。こうした事実は、町との関係が千總の長年の商売には不可欠であったことを示唆する。本シリーズでは土地や建物または行事に関する資料を、町と千總を繋ぐ依代と捉えてテーマに取り上げ、千總の商売を育んだ三条室町という地域について学び、千總のみならず地域の営みへの理解に繋げることを目指す。

第2回目のテーマは江戸時代の「町家」である。町家とは生活と商売が共存する空間であり、そこには暮らしの知恵と工夫がつまっている。「鰻の寝床」と称されるほどに奥行きが長く、果てしない空間の広がりを感じさせる京町家は、人々が築いた美意識の広がる小宇宙とも言えよう。現在は近代的なビルである千總の社屋も、戦前までは三条通りに軒を連ねるひとつの京町家であった。本会では、日本およびアジアの民家や近代建築に関する歴史が専門の大場修氏を講師に迎え、近世における千總の店の間取り図（複写）や建築仕様書を読み解いた。さらに、同時期に建てられた京都内外の町家および民家の事例紹介を通して、間取り図に記された建物や空間のイメージを膨らませることで、当時の人々の暮らしにせまった。本稿は、本特別鑑賞会・講演会の内容の一部を書き起こして報告するものである。

［講師］

大場 修（おおば おさむ）

立命館大学 衣笠総合研究機構教授／京都府立大学名誉教授

工学博士。『近世近代町家建築史論』（中央公論美術出版、2004年）で日本建築学会賞（論文）を受賞。『「京町家カルテ」が解く　京都人が知らない京町家の世界』（淡交社、2019年）で日本建築学会著作賞を受賞。近年の著作に『京都　学び舎の建築史』（京都新聞出版センター、2019年）、編著に『占領下日本の地方都市－接収された住宅・建築と都市空間－』（思文閣出版、2021年）、編著『京丹後市のまちなみ・建築』（京丹後市、2017年）、共著に『くらしの景観　日本と中国の集落』（臨川書店、2022年）、『日本の建築文化事典』（丸善出版株式会社、2020年）などがある。

コラム | Column

写真でたどる社屋の変遷

小田桃子

京都の烏丸三条を西に入るとあらわれる千總本社ビル。現在は幾何学的なデザインの建物だが、かつての社屋は実に多彩な建築様式であったようだ。試みに、現存する写真をもとに、明治時代以降の社屋の変遷を辿ってみよう。

まずは、特別鑑賞会・講演会「千總・西村家の町家図面を読み解く―近世京町家の造りと暮らし」でも取り上げられた、明治期の社屋（店）だ（Fig.2.5.1）。当時は、近世の雰囲気を残す、趣ある町家形式であった。写真からは、複数の棟で構成される町家が、通り一帯を占めていた様子をうかがえるだろう。なお、建築意匠に関する詳述は別稿の講演会録を参考にされたい。町家形式の社屋は、増改築を繰り返しながらも、昭和末期まで踏襲された。1940（昭和15）年撮影と記録された写真（Fig.2.5.2）には、その過渡期の姿が写る。

ところで、この町家形式の社屋の裏側には、1938（昭和13）年頃から昭和末期まで三条通を背にする形で洋風建築が存在した（Fig.2.5.3）。写真をみるに、スパニッシュ様式を採用したモダンな建築で、奥の庭に出て初めて建物の全容が見えるつくりであったようだ。日本的な町家を抜けると、異国情緒漂う洋館があらわれる様は、来訪者にとって心躍る体験になっていたのかもしれない。

実はそれ以前にも、千總には西洋の建築様式を示す社屋が存在した。明治期以降の千總（西村總左衛門店）では店を内国方と外国方に分離し、1919（大正8）年までに内国方の千總商店と、外国方の西村貿易店が成立する。そして、外国方や西村貿易店の社屋として洋風建築が用いられた 。順を追って見てみよう。まず、西村總左衛門貿易店として、現在確認できる最も古い画像記録が『京都府誌　下』（京都府, 大正4年）に掲載される写真だ（Fig.2.5.4）。当時の雑誌や千總の広告を参考にするに、所在はおそらく現在の本社ビルの向かいであったと推測される。その後、株式会社に改組した1920（大正9）年に西村貿易店の新社屋が竣工した（Fig.2.5.5）。いずれも古典主義の流れをうかがわせる重厚な洋風建築である。なお、この建物は文椿ビルヂングとして現存している。ところがその3年後の東京の京橋において、フランク・ロイド・ライト建築を彷彿とさせる、遠藤新設計の社屋が建てられる（Fig.2.5.6）。一説によると、これは関東大震災から復興する過程で建築された仮社屋とされるが、京都社屋と大きく異なる様式が実に興味深い。この仮社屋は1930（昭和5）年までに前田健二郎設計の社屋（Fig.2.5.7）に建て替えられる。仮社屋とは異なり、曲線が印象的なデザインで、当時の西村貿易店の勢いと華やかさが偲ばれる。

このように、千總商店と西村貿易店で、または西村貿易店の東京と京都で、千總は多彩なデザインの社屋を建てていた。設計意図は明らかでないが、一般的には社屋の建築デザインは会社のイメージ作りにつながるため、こうした社屋のデザインは当時の千總のブランドイメージを体現するものであったに違いない。時代や地域によって、人々は多様なイメージを千總に抱いていたのだろう。

註　各社屋の建築様式については、マルティネス・アレハンドロ氏（京都工芸繊維大学）に指導を仰いだ。

1. 『工事年鑑　昭和十三年版』株式会社清水組, 1938年
2. 『京都府誌 下』京都府, 1915年
3. 『染織新報』第139号（染織新報社, 1903年8月, p.14）には、1902年11月に三条烏丸の本店の向かいに洋館を建設したと記される。
4. 建築写真類聚刊行会『建築写真類聚 第4期第12回バラツク建築』（洪洋社, 1923年）および天野恵『八十歳の履歴書』（1979年）

社会活動

［講演･レクチャー］

1. 千總―その技術と美―
日時：2023年3月19日
大会名称：岡山大学大学院「CRE-Lab.創造性フォーラム2023」
実施場所：岡山大学
実施者：加藤結理子

――

2千總―その歴史とデザインと技術―
日時：2023年2月14日
授業等名称：同志社大学KCJF留学生プログラム「世界に通じる京の職人」
実施場所：千總本社ビル
実施者：加藤結理子

――

3. 染織技術から学ぶ人のクリエイティビティ
日時：2022年9月10日
授業等名称：函館工業高等専門学校公開講座
実施場所：函館工業高等専門学校
実施者：加藤結理子

――

4. 千總のものづくり
日時：2022年7月13日
授業等名称：京都工芸繊維大学講義「伝統文化とデザイン」
実施場所：京都工芸繊維大学
実施者：加藤結理子

――

5. 千總のものづくり―パトロネージュとイノベーション
日時：2022年6月11日
授業等名称：同志社大学美学芸術学実地演習Ⅱ
実施場所：千總本社ビル
実施者：加藤結理子

［教 育］

京都芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター
内容：客員研究員
実施者：小田桃子

［学会発表］

1. 桶出し絞りを題材にした探求の実践報告
日時：2023年3月15日
大会名称：第29回大学教育研究フォーラム
実施方式：オンライン
実施者：下郡啓夫（函館工業高等専門学校）、西井美佐子（女子美術大学）、加藤結理子

――

2.「きもの」を題材とした中学生むけSTEAM教育プログラム開発の試み
日時：2023年3月11日
大会名称：日本STEM 教育学会拡大研究会
実施方式：オンライン
実施者：加藤結理子、下郡啓夫（函館工業高等専門学校）

――

3. STEAM教育としての「きもの科学部」
日時：2023年3月11日
大会名称：日本STEM 教育学会拡大研究会
実施方式：オンライン
実施者：下郡啓夫（函館工業高等専門学校）、加藤結理子

――

4. 株式会社千總所蔵〈大津唐崎図〉の調査報告―岸竹堂の色材と技法―
日時：2022年6月18日
大会名称：文化財保存修復学会第44回大会　ポスターセッション
会場：熊本県立劇場
内容：文化財保存修復学会第44回要旨集 pp.142-pp.143
実施者：小田桃子、増渕麻里耶（京都芸術大学）、根岸カノン（京都芸術大学）

［取 材］

1. 千總・西村家の町家解説　特別鑑賞会・講演会実施　千總文化研究所
発行日：2023年3月6日
発行：染織新報社
担当者：小田桃子、加藤結理子、林 春名

――

2. きものに科学的アプローチ　中学生向け教育プログラム　千總文化研究所
発行日：2022年12月7日
発行：京都新聞
担当者：加藤結理子

――

3. 着物の技術　科学的に学ぶ　千總が中学生向け講座
発行日：2022年11月21日
発行：産経新聞
担当者：加藤結理子

［報 告］

京都の美術工芸の近代化に関する基礎的研究―12代西村總左衛門の活動を通して―
発行日：2022年11月1日
書籍名称：高梨学術奨励基金年報　令和3年度助成研究成果報告
発行：公益財団法人　高梨学術奨励基金
内容：若手研究助成研究成果概要報告, pp.306-pp.313
担当者：小田桃子

展覧会協力活動

当研究所は、千總の所蔵品の保存管理業務の一環として、千總ギャラリーの展覧会実施や他館への貸出時における、所蔵品調査および企画に対する協力を行っている。本年度は下記の通りに活動を実施した。

貸出に係る調査協力

1.「津田青楓 図案と、時代と、」
会場：渋谷区立松濤美術館
会期：2022年6月18日（土）～8月14日（日）
調査対象作品：友禅裂〈波に雲龍文様〉、友禅裂〈萩の玉川文様〉、友禅裂〈几帳に鷹文様〉、〈袱紗図案〉、〈絵刷冊子 No.142〉、〈友禅見本裂〉、〈懸賞募集図案帖「夏模様」〉、〈懸賞募集図案帖「春模様」〉、『景年花鳥画譜』、『当世染様千代のひいなかた』下巻、『正徳ひいなかた』、『新雛形千歳袖』

——

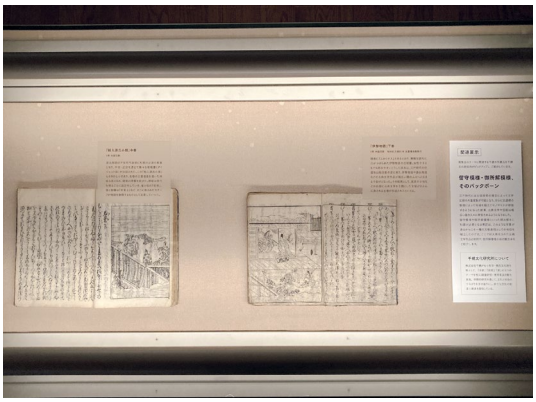
2.「綺羅めく京の明治美術 ― 世界が驚いた帝室技芸員の神業」
会場：京都市京セラ美術館
会期：2022年7月23日（土）～9月19日（月）
調査対象：岸竹堂筆〈梅図〉、同〈猛虎図〉、同〈月下猫児図〉、今尾景年筆〈群仙図〉

——

3.「木島櫻谷―山水夢中」
会場：泉屋博古館
会期：2022年11月3日（木）～12月18日（日）
調査対象作品：木島櫻谷筆〈万壑烟霧〉

——

4.「KIMONO」
会場：Musée du quai Branly - Jacques Chirac（フランス）
会期：2022年11月22日（火）～2023年5月28日（日）
出品作品：ヨウジヤマモト〈振袖〉および〈帯〉



展示風景　「不在を見る　在るを知る」展

千總ギャラリーの展覧会への協力

1.「千總の屏風祭―明治の屏風祭ふたたび」
会期：2022年5月28日（土）～9月5日（月）
内容：企画協力、作品調査、コラム執筆
協力展示における出陳内容：〈絵刷冊子No.146〉、〈型友禅裂 紅無友仙見本裂〉、〈第24回懸賞募集図案（全3巻の内，1巻目）〉
執筆内容：千總公式webサイト展覧会コラム「近世祇園祭の残香」（2022年8月29日、小田桃子）
（https://www.chiso.co.jp/gallery/news/220829/）

――

2.「理外の理」
会期：2022年9月10日（土）～12月12日（月）
内容：企画協力、作品調査
協力展示における出陳内容：〈卓被窓掛雛形〉、〈縮図捲り〉
関連情報：千總公式webサイト展覧会コラム「『景年花鳥画譜』を求めた時代」（2022年2月21日公開、小田桃子）

――

3.「不在を見る　在るを知る」
会期：2022年12月22日（木）～2023年3月27日（月）
内容：企画協力、作品調査、一部の展示ケースにおける展示、コラム執筆
協力展示における出陳作品：『修紫田舎源氏』、『伊勢物語』下巻、『絵入源氏小鏡』中巻、「御所解雛形」
関連情報：千總公式webサイト展覧会コラム「御所解模様を読む」（2023年3月14日、林 春名）

所蔵品の保存管理活動

千總には、約130点の小袖をはじめ、絵画、工芸品、古文書・典籍、歴史資料など、多岐にわたる文化財が所蔵されている。当研究所はそうした所蔵品を次世代に確実に受け継ぐべく、日常的な保存管理業務を行っている。本年度の実施内容を以下の通りに報告する。

1. 保存環境整備

近年の文化財保存科学に関する研究成果に基づき、保存環境の改善に取り組んでいる。本年度は、箱や袋などの保存具の新調、ならびに温湿度および防虫対策に関して下記の通りに整備を実施した。

［保存具の新調］

・屏風および扁額など計7点における保存箱の新調

［温湿度・防虫対策］

・防虫処理のための収蔵庫内の燻蒸
（施工者：イカリ消毒株式会社）
・収蔵庫内への棚新設
・収蔵庫の温湿度モニタリング

2. 記録作成

所蔵品には染織品や絵画などの美術工芸品だけでなく、過去の法衣や友禅などの商売に関する膨大な古文書および歴史資料が多く含まれる。所蔵品の全貌および収集背景を把握すべく、当研究所は所蔵品の整理および目録作成などの悉皆調査と所蔵品の撮影を進めており、本年度は右記の通りに実施した。

悉皆調査の様子

［悉皆調査］

・近代の賞状類463点、古典籍および近代書物493件、古文書および法衣雛形72件

［撮影・スキャニング］

・古文書72件

3. 資料収集に係る協力

コレクションの充実を目指して、千總は近世・近代の千總または当主・西村（千切屋）總左衛門に関する作品を随時収集している。当研究所は作品の購入に際し、専門的見地から調査・助言を行う。本年度は下記の寄贈に協力した。

・近代服飾資料（振袖、袋帯、帯締め、長襦袢）3点
・掛軸6点、染織関連資料2点
・近代服飾資料（打掛、被布、被布用支柱）3点
・近代服飾資料（長襦袢、羽織、振袖など）69点

4. 所蔵品修理

所蔵品は、町内行事、ものづくり、展覧会などのあらゆる場面で展示活用されてきた。そうして年月を経て脆弱化した所蔵品の修理にあたり、当研究所は修理の運営および指導助言を行っている。本年度は下記の修理事業を行った。

［絵画］

・岸竹堂筆〈大津唐崎図〉（1875）八曲一双　絹本著色
本紙の裂けや著しい汚れおよび下地骨の歪みを改善すべく、組子下地および肌裏紙の交換をともなう解体修理を実施。2022年度より2ヵ年の工期を予定する。
（実施者：株式会社岡墨光堂）

千總文化研究所 年報

【 第 5 号 】
2022年5月－2023年4月

Institute for Chiso Arts and Culture
Annual Report [Fifth issue]
May 2022—April 2023

2024年4月1日 発行

編集　一般社団法人千總文化研究所
翻訳　株式会社ユー・イングリッシュ、Alejandro Martinez de Arbulo
アートディレクション＆デザイン　株式会社フィールド
印刷　株式会社サンエムカラー
発行　一般社団法人千總文化研究所
〒604-8166 京都府京都市中京区三条通烏丸西入御倉町80